貴陽紀行

○ プロローグ

チベット行きは、現地のガイドが、必須の為、日中友好観光（株）という旅行会社に依頼したが、その際、旅行会社の壁に、貴州旅行の張り紙が出ていて、貴陽への旅行を思いついた。この旅行会社の貴州ツアーの担当者と話すと何人か、ツアーの人数が集まれば、企画するらしい。当初、インターネットで貴陽のホテルを探したら、有ることはあるが、皆、えらく高いので、しばらく、貴陽行きは、諦めていたが、ハバナから帰って、ハバナ行きの際に使ったホテルガイドのインターネットで貴陽のホテルを探してみたら、7、8千円のホテルが有るので、まず、貴陽往復の飛行機をインターネットで購入し、ホテルも予約した。これが、ハバナから帰ってからの6月下中の話。その際、貴陽への日程表も作成した。この日程表は、10月になってから、会社のへの休暇届の際提出し、私の部屋のドアにも張り出した。カミさんが、見たかどうか、不明。貴陽旅行の日程は、以下の通り。

1. 2016年10月12日（水） 羽田空港国際ターミナル、中国東方航空MU576便
   8：40分発で、上海浦東国際空港へ（10：20分着）。地下鉄の二号線で上海虹橋空港ターミナル2へ、14：20分発の上海航空MU9457便にて、（貴陽）竜洞堡空港へ（17：10分着）。同空港から、ホテルのシャトルバスか、タクシーで、貴陽諾富特酒店へ。
2. 10月13日（木） ツアーバスで、黄果樹風景区観光。
3. 10月14日（金） ツアーバスで、龍宮風景区観光。
4. 10月15日（土） 貴陽市内観光。
5. 10月16日（日） 帰国。ホテル、5時前には起きて、ホテルのシャトルバスかタクシーで、（貴陽）竜洞堡空港へ（6時には着くように）。
   7：15分発の上海航空MU9460便にて、上海浦東国際空港へ（9：45分着）。同空港から、12：00発の中国東方航空MU521便にて、成田へ（15：55分着）。

○ 2016年10月12日（水） 貴陽へ

朝寝坊するといけないと目覚まし時計を2台セットして、昨夜は寝たが、四時半前には起き出して、昨夜のうちにパッキングを済ませたリックを背負って、5時前には、昭島の駅に。立川で乗り換えて、神田、品川、京急線で羽田国際空港へ。空港の最初の両替所で、5万円前後で切りの良い元両替したいと言ったら、5万数千円で、3千元と言うので両替した。以前の中国行きの際の人民元が3百数元持っていたので、両替

の3千元は、そのまま財布に入れて、3百数元をズボンのポケットに。（海外では、私は、常に、お金は、その日の大体の予定額をズボンの左ポケットに入れて使い、財布は、買い物の際などは、取り出さない。）

中国東方航空の飛行機だが、乗り込んでアナウンスを聞くとこの便は、日本航空と共同運航でJALマイルが付くらしい。日本語の分かる（日本人だったか？）スチュワーデスに、聞くと上海空港で航空券を見せれば、JALマイルが貰えるらしい。（実際は、帰りのチェックインの際、この航空券を見せても、付けて貰えず、JALマイレッジに、航空券を郵送等すれば、貰えるらしいが、面倒なので帰りの便のみポイントを付けて貰った。）貴陽空港への飛行機は、上海浦東空港からではなく、地下鉄で、上海虹橋空港まで移動しなければならない。空港の地下鉄の看板矢印目指して進み2番線の地下鉄に乗り込んだ。乗り込む際、何の気なしに、隣のお姉ちゃんに、虹橋空港ターミナル2に、行きますかと聞いておいたのが幸いして、同じ2番線でも、知らなかったが、途中で、乗り換えなければならない。乗り換えの際、このお姉ちゃんが、乗り換え教えてくれた。乗り換えの際に、もたもたして乗ったので、座れず、しばらく立っていたが、途中で、残念ながら、疲れた老人（？）と見られたらしく、私の後ろにいた青年が、空き席教えてくれた。

上海虹橋空港も、中々、広く、途中で空港職員に、チェックインのカウンター教えてもらった。貴陽空港への便は、乗り込むのが、遅かった為か、私のリックが、既に、飛行棚は、一杯で、入らない。スチュワーデスに、何処かないか聞いたら、座席の下に置くように言うが、それでは、狭くて座れないと文句言ったら、ビジネスクラスの空いたロッカーに、入れるよう一番前の席まで、持って行って、置いて来た。貴陽までの飛行時間は、2、3時間で、まだ明るいうちに、着いた。貴陽空港も、地方空港としては、広く、ホテルのシャトルバス乗り場が、あるらしいが、分からない。市内行きのバスのチケット売り場のお姉ちゃんに、ホテルの名前書いた紙見せて、ホテルのシャトルバス乗り場聞くと、何を言っているのか、分からない。“チン、シェ、イシャー！”と場所名を紙に書いてもらって、“第四ステーション”と言って指差すが、良く分からないが、指差した先に進んで、また聞けばいいかと、それらしき場所を探して進んだが、分からない。余り人も通らず、清掃の叔父さんに、書いて貰った紙を見せながら、何処か尋ねると空港の駐車場らしき方向を指差す。駐車場で、最初に、紙を見せながら、同じように聞くと、外国人ということで、その若者達は、嫌がって逃げ出してしまった。次の男性一人に、女性二人の三人組に、尋ねると、ホテルに電話をして聞いたりしてくれていたが、その内、親切にも、彼らの自動車で、ホテルまで送ってくれることとなった。現在の中国も、スマホ時代で、スマホでホテルまでの地図探し当て、送って貰った。その際、隣に座った王さんは、聞くと、やはり一人娘で、その内、ノートの紙を破って、電話番号書き出して、何か、困ったことがあったら、電話くださいと、“何て親切な娘さんだろう”と驚くばかりである。ついでに、メールアドレス教わって、写真を撮って、送って

あげることにした。ホテルに着いたら、ボーイにも、四人一緒の写真も、撮って貰った。お礼のお茶代のつもりで、百元札渡そうとしたら、固辞されてしまった。現在中国も、豊かになって、皆さん、随分、親切になった感がする。フロントのお兄ちゃんは、私の北京語では、通じない部分があり、その内に、“チン、メイ（青梅）さん”と言うお姉ちゃんが、英語が旨くて、彼女に、明日のタクシーをチャーターしての市内観光の五箇所（①花渓、②青岩（遺跡）、③黔霊山、④貴州博物館、⑤甲秀楼）等紙に書いて貰って教わった。明日、ここを回るのに、タクシーの運ちゃんとの電話連絡では、400元から500元でと私から伝えたら、500元ならば、とのことなのでOKした。明後日のツアーについては、ツアーのパンフレットもらって、明日の夕方、また、チンメイさんに、相談することとし、貴陽市内の地図も貰った。

（親切な王媛媛さん）

（高さん、王さん、筆者、曲さん）

夕飯は、ホテルのレストランとしたが、今回のホテルは、朝食も付かず、聞くと、朝食は、69元とのことで高い。夕飯も、バイキングコースで、98元と高い。ビールを一本飲んだら、合計、百数元と高くて、明日の朝食は、コンビに、しようと、ホテルの近くを歩いたら、裏町の一角に、24時間のコンビニがあり、部屋に、冷蔵庫もあったので、ヨーグルト、菓子パン、ジュース等買ってきた。まだ、8時位であったが、早々に、ベッドにもぐりこんだ。

（ホテルの近く通り）

（泊まった、貴陽諾富特酒店）

○ 10月13日（木）市内観光

叫醒服務（ジャオシンフーウー）を6時に頼んでおいたが、4時半には、起き出して、部屋が広いので、何時もの、ラジオ体操、柔軟体操の後にシャワー。何故か、このホテルは、時計がない。散歩に出かけた際、フロントのお姉ちゃんに、”シエモ、シホーア？“（何時ですか？）”と聞くと“ウー、デン、バン（5時半）”とのこと。（これが、貴州弁なのか、コンビニのお店でも、間違えて気付いたが、6のリュゥー、が、貴州弁は、（リュ）ウーと私には、聞こえて、5（ウー）時半と、勘違いした。）私の携帯電話の時刻は、7時半なので、貴陽は、時間が、日本より、2時間遅いと思い込んでしまった。今日のタクシーの運ちゃんとのフロントでの待ち合わせ時間は、7時だったので、私の携帯の時間（中国は、一時間の時差の為か、日本時刻しか、表示しない。）の9時前に、フロントに降りていったら、私の携帯の9時を過ぎて、いらいらして待つも、それらしき運ちゃんは、現れない。フロントのお兄ちゃんに、今日のタクシーの7時の予約の話をしたら、携帯で電話して、運ちゃんを呼び出してくれたが、何と、6時半からホテルの前で待っていたタクシーだったらしく、現在は、8時過ぎとのこと。一時間半も、待っていたらしい。乗り込んで、“ツィプチー、ウォー、メイヨウ、ショウピャオ。（ごめんなさい、私は、腕時計が無いので。）”と謝った。（本当は、一時間、時間を聞き間違えてしまったのであるが、残念ながら、その説明が、中国語だけでは出来ない！）

五箇所の今日の観光の場所の書いた紙を渡して、回る順番は、運ちゃんに任せた。まずは、②青岩（遺跡）に、行くとのことに。市街地から、3、40分、走ったか。広い駐車場で、運ちゃんの車（ツェ、運ちゃんの苗字）さんは、待っているとのことで、かなり広いが、遺跡の東西南北の各門を中心に、見て回った。

（入り口の博物館か）

（最初の遺跡街並み）

（最初の南門か）

（スペインからの観光客がいたので、少々話した。）

（こちらが、南門？）

（やはり、中国人の観光客が、多い）

（北門だったか）

（北門）

（東門への工事中の通り）　（工事中の東門）

（西門）　　（土産物屋の民族衣装のお姉ちゃん）

（帰り際の入り口での爆竹の煙）

駐車場の車では、運ちゃんは、リクライニグに、座席を倒して寝て待っていた。次は、①の花渓（ファー、チー）へ。名前から、どんな場所か、分からなかったが、いい加減に、30分後に、迎えに来てと、頼んだのが、大きなミスで、30分では、回り切れないほど広い観光地で、全部回るには、2，3時間は掛りそう。降りた場所の近くは、観光を終えた後でのジンギスカンの料理屋さんなどの並んでいる場所で、その料理屋さんを少々見て回って、30分後の迎えの車に乗り込んだ。次は、期待の貴州博物館。

（花渓の観光の途中の昼食や、帰りの夕食の料理街らしい）

貴州博物館は、一時間半後に、迎えに来てくれるよう頼んで、博物館までの坂を上って行ったが、入り口らしき大きなドアには、大きな錠鍵が、掛っている。坂の途中に、守衛さんらしき小屋があったので、中に居た保安員（？）のお兄ちゃんに、運転手（車さん）の携帯番号見せながら、“チン、ダー、デンホア。（電話を掛けてください）“と頼むも、何と、この保安員は、携帯電話（スマホ）を持っていないとのことで、無線機で、スマホを持っている保安員を呼ぶとのこと。また、中々、中国語だけでは、話が通じず、

英語を話す上司も呼ぶとのこと。その内、スマホ持った保安員が来て、車さんに、直に迎えに来るよう伝えてもらった。その内、英語を話す上司らしき保安員も、来たが、英語で話すことも無く、”シェ、シェ、ニーメンダ、ハオイー。（あなた方の御好意に、感謝します。）“とお礼を言って別れた。そんなに待つことも無く、車さんは、迎えに来た。

（閉まっていた貴州博物館）

　次は、お腹が空いたので、車さんに、御馳走するから（ウォー、チンコー）美味しいレストランに、連れて行ってくれと頼んだ。しばらく車を走らせて、郊外の大きなレストランに入って、私は、ビールを飲ませてもらって、チンジャオロースト、チャーハンを頼み、車さんも、肉料理とご飯を頼んだが、チャーハンの量が多く、チャーハンを二人で分けて、チンジャオロースト、彼の頼んだ肉料理も、分け合って、二人で食べた。大盛りのご飯など、一つも手をつけなかった。それでも、ビールも一本飲んだのに、百数十元と安かった。次は、甲秀楼へ。

（人で賑わう入り口の門）

（甲秀楼）

（最上層内部）

（隣の建物）

車さんとの待ち合わせ場所は、私の理解では、甲秀楼の向こう側に、一時間後と思って、一時間ぐらいして、向こう側に向かうが、出口というものがなく、小学校だったり、他の官舎のような建物があったりで、待ち合わせ場所らしきものがない。しばらく、ウロウロしたが、分からず、降りた通りに戻って、誰かに、車さんの携帯に、電話してもらおうとしたが、何故か、警備員のような、叔父さんは、聞いたが、二人とも、携帯は持ってないとのこと。少々困っていたら、車さんのタクシーが通りに現れて助かった。

車さんには、ホテルには、英語の旨い“ファンイー（通訳）”のフロントのお姉さん（チンメイ（青梅）さん）がいる話をしてあったので、ホテルに戻って、そのお姉さんと話したいとのことで、ホテルに戻った。私は、もう一箇所（③黔霊山）残っていたが、今日は、もう終わりでよいと思っていたが、・・・・、何故か、車さんには、五百元払っても、帰らず、フロントの人達と何か話している・・・。その内、打ち合わせ途中だったチンメイさんが、現れて、聞くと③黔霊山には、今日は、これから、車で、連れて行くが、帰りは、別のタクシーで戻ってほしいとのことだった。（私は、時間が、結構掛ったから、値上げでもして欲しいとのことかと思って、心配したが・・・・。）今日は、結構歩き回って疲れたので、これで、終わりとし、車さんとは、“シェーシェー、ツアィチェン！”と別れた。チンメイさんとは、明日のツアーの話となり、明日は、ホテルに泊まるガイドが（ここは、聞き間違えた・・・。）、ホテルから、私を連れて行ってくれるとのことだったので、そのガイドの名前と携帯番号を教えてくれと頼んだら、夜の9時に、部屋に届けるとのことで、私は、（ホテルの夕飯は、高いので、）街のレストランを探しに出かけた。結構歩き回ったが、結局、ホテルの近くの大衆食堂のようなお店に入ることに。写真のメニューが、壁に貼ってあるので、一品選んで、ビールとご飯も、頼んで、確かに、ホテルのレストランの半分以下であったか。ホテルに戻って、ベッドで、ビールのほろ酔い加減で寝ていたら、フロントマンが、明日の乗るツアーバスの番号とガイドの名前と携帯番号書いた紙を持って来た。

○ 10月14日（金） 黄果樹風景区、龍宮風景区バスツアー

朝の6時10分に、フロントでの待ち合わせだが、昨夜も早くから寝たので、4時半過ぎには、起き出した。起きると、まず、ポットでお湯を沸かして、部屋に備え付けのお茶を飲み、柔軟体操、シャワーと何時もの日課。昨夜、コンビニで買い込んだ、菓子パン、ヨーグルト、ミカンとバナナなどの朝食。食後に、これも、備え付けのインスタントコーヒーは、毎朝飲んだ。外はまだ暗い、6時には、フロントに下りていったが、ソファーに座って待つが、それらしい人は、現れない。結局、ガイドではなく、このホテルのお客のシンさんという、ちょっと怖い顔した大男（1メートル90センチとのこと）が、一緒に行くとのことらしく、“ハロー”などと声を掛けて来て、一緒にホテルの前のタクシーに乗り込んだ。“ニン、ホイ、ショー、インユン、マ？（英語を話しますか？）”と聞くと、

出来ないとのこと。広東の人とのこと。広州の近くのようだが・・・・。（張家界の際のお世話になった際の五人組のお姉ちゃん達も、確か、広東の人達だったか。）タクシーの運ちゃんが、我々の乗るツアーバスの番号探し当て、バスの近くで降りた。外はまだ暗い。シンさんは、近くの屋台で朝食。私の分まで買おうとしたが、私は、食べて来た旨伝えた。ツアーバスには、シンさんは、背が高いので、最後列の真ん中に座り、隣は、前の席の背もたれが壊れているので、その隣に、私は座った。客は、満席のようで、その席にも、後から、張さんと言う‘武漢“からの夫婦の叔父さんの方が、座った。奥さんともう一人の連れの叔母さん達は、1、2列前の席に座っていた。ガイドのこれも、張さんというお兄ちゃんの説明は、話が早くて、少しも理解できない。まあ、ここは、シンさんと行動を一緒にすることにした。私とシンさんは、”十五号“と言うグループ名呼ばれることになり、ガイドの張兄ちゃんの、その後の確認の点呼では、シンさんが、常に答えていた。

ツアーバスの最初の停車は、休憩所で、朝食とトイレ時間のようであり、私も、トイレに行ってきた。続いての停車は、いきなり、お土産屋さんで、買い物に。ツアーバスを降りる際、大きなビニール袋を貰って、皆さん、お土産を買っては、その袋に詰め込んでいた。シンさんも、袋一杯に、お土産買い込んでいた。シンさんの話では、有名なお土産らしいが、私は、お土産は、買えない主義（？）なので、何も買わなかったが・・・・。

次いで、ツアーバスから、別の観光用のバスに乗り換えて、黄果樹風景区へ。

（黄果樹大瀑布）

シンさんは、私の写真は撮ってくれるが、私が、シンさんの写真を撮ろうと言うと、何故か、頑として撮らせてくれない。

寶客亭

（365日の日付が）

途中のお土産屋では、シンさん、ソーセージ焼きを御馳走してくれたので、お返しに、ハンバーグでお返しした・・・。しかし、この直後、皆で、昼食の円形テーブルのお店へ。まず、自分の茶碗とお箸を洗う。その内、十皿くらいのおかずが、沢山並べられ、皆で、お箸で取って食べる。ご飯も、自分で、自分の茶碗に盛って食べる。私には、余り美味しそうな料理が無くて、ハンバーグを食べておいて良かったか。

次いで、また、次のバス乗り場で、並んで、バスに乗り込んで、龍宮風景区へ。

（龍宮入り口の奇岩）

（龍宮風景区への長いエレベ-ター）

（龍宮大瀑布）

シンさんは、背が高くて歩くのが早いが、この地区も、帰りの時刻と戻る場所は、シンさん任せなので、何としても、着いて行くしかがない。シンさんは、滝の近くまで登って行く勢いなので、私は、相当歩き疲れて行く元気が無く、途中で、待っていると伝えたら、それなら、集合場所に、戻ったらというような話しだが、私は、集合場所が分からないと言うと、来た道を戻り、降りたエレベーターを昇って、龍宮風景地区への最初に集まった大きなLEDテレビ画面の前のところが、集合場所だと紙に書いて教えてくれた。帰りの道は、一人だったので少々不安では有ったが、お土産屋さんの並ぶ通り遠回りして回りながらも、何とか元のLETテレビ画面の集合場所に、たどり着いて、そこの長椅子に座って待っていた。その内、我々のグループの人達も、集まりだしたので安心した。ガイドのお兄ちゃんも来たので、シンさんは、少々遅れる話伝えたら、知っているとの口ぶりだった。その内、シンさんも、戻ってきて、ガイドのお兄ちゃんの点呼確認後、観光用のバスに、皆で乗り込み、ツアーバスの停まっている駐車場へ。

ツアーバスに戻ったので、これで、貴陽に戻るものと思ったら、帰りの途中で、宝石・貴金属のお土産屋さんに連れて行かれ、美容液の宣伝の説明会のようなものがあり、叔母ちゃん達は、説明のお兄ちゃんとの漫談のやり取りで、笑い合ったりしているが、私には、全然分からない。次いで、お土産の宝石・貴金属の陳列棚での説明が続く・・・・。途中で、シンさんに、私は、バスに戻ると話したら、シンさんも、一緒に戻るとのことで、外に出たが、バスのドアが開いてなくて、しばらく外の椅子に座って開くのを、待っていた。シンさんが、油揚げのようなものを買ってきてご馳走してくれた。

長い一日ツアーバス旅行であったが、やっと、貴陽への帰路に。貴陽駅に、着いたときは、すっかり暗くなり、夜の8時頃であったか。降りる際、シンさんは、それでは、というような感じであったが、私が、ご馳走するから、一緒に夕飯食べようと誘うと乗ってきて、知っている美味しい魚料理屋に行くとのことで、貴陽駅のネオン輝く街並みをどんどん進むが、中々、分からなく、途中で、白タク捕まえて乗り込んだ。この運ちゃんも、私には、怖い感じの叔父さんで、ネオン輝く貴陽の街並みを白タクで大男のシンさんと三人で廻るのも何か、奇妙な感じではあったが、その内、大きな鯉を一度焼いてから料理する、屋台料理屋へ。シンさんは、親分肌で、この運ちゃんも、一緒に食べろといった感じで誘う。流石に、ビールだけは、シンさんと私だけで飲んだが、確かに、美味しい鯉料理であった。値段も、百数十元と安く、私が支払った。運ちゃんとシンさんは、更に何処かに行くらしく、私だけ、運ちゃんが、ホテルまで送ってくれて、お金払おうとしたら、シンさん払いのようで、受け取ろうとしなかったので、“シェーシェー、ツァイ、チェン”とお礼を言って、ホテルの玄関で降ろして貰った。

何時ものように、シャワーは、明日にして、早々に、ベッドにもぐりこんだ。

○ 10月15日（土） 貴陽市内観光

昨夜は、11時過ぎと結構、遅く寝たが、6時過ぎには、起き出した。昨日のバスツアーでは、ガイドの話は、早すぎて分からないし、お土産屋さんに、連れて行かれるのも、余り面白くないので、今日のバスツアーは、止めにし、また、車さんのタクシーで、市内観光をすることにした。フロントで、車さんに電話して貰ったら、OKのようで、9時過ぎに来てもらうよう頼んだ。フロントのお兄ちゃんに、貴州博物館が、開いているか電話で聞いてもらうよう頼むが、中々、通じなくて、代わった英語の少々出きるお姉ちゃんは、自信を持って貴州博物館は、開いていると断言したので、今日は、貴州博物館と、もう一箇所の黔霊山（黔霊公園）と美味しいレストラン（ご馳走するとのことで）を回ることで、車さんとは、300元で交渉成立した。

何故か、車さん、貴州博物館を、貴州図書館と勘違いしたらしく、貴州図書館で降ろそうとした。貴州博物館に、着いて、貴州博物館への坂道を上がる前に、土曜日なのに、人気が少ないので、車さんの携帯で博物館に、電話して貰ったら、何と、貴州博物館は、ここのところ、閉館しているとの電話テープが回っているとのこと。何だったのだろうフロントのお姉ちゃんのあの自信は？

黔霊公園の前で、降ろしてもらって、11時半ごろ、迎えに来て貰うことにした。土曜日なので、大勢の人で賑わう公園の中に入っていった。黔霊山というのは、この公園の中にある霊山のようである。

（黔霊公園の入り口の門）

（観光客を恐れない沢山の猿が居た）（観光客から奪った食べ物を食べる猿）

（賑わう民族衣装の踊りだったか）

（何しろ、沢山の猿達）

（動物園への広場の花壇）　　（動物園への入り口）

（湖が見えたが、降りてゆく元気なし）

（山の上の弘福寺）

三洲感應
氣懾霜秋威鎮法門成佛子

（帰りの急な階段）

（中腹の観音像）

弘福寺までの登りは、山を、ぐるりと回る感じでの緩やかな坂道を登ったが、帰りは、いろは坂のような階段を降りた。

（公園の入り口の池）

（トランプを楽しむ老人達）

（民族楽器を使っての野外カラオケ）

入り口の門まで戻ったが、まだ、11時頃なので、トランプを楽しむ老人達や、民族楽器を弾いての野外カラオケなどを聞いて時間を潰した。何処かで、碁は、打ってないかと探したが、大きな駒の中国将棋を楽しむ人達は居たが、碁を楽しむ人は、居なかった。公園前の停留所の前には、車さんは、きっかり、11時半には、迎えに来た。

次は、美味しいレストランで、“チンダン、ダ、ジーロウ、ダ、リャオリー（さっぱりした、鶏肉の料理）”のお店と頼んだ。

（車さんとホテルの前で）　　（車さんお奨めのお店）

車の中でも、お店でも、“シャ、ウェイチ（囲碁）”の打てるところを探してもらったが、盛んに、携帯で、何処かに電話するも、見つからないようで、午後からは、中国の人と碁でも、打ってみようかと思ったが、無理だった。

（店内）

（車さんお奨めの鶏肉料理）

（美味しいものばかりであった）

午後からは、歩いて貴陽の街を探索することとした。
一度、車で行ったが、また、近いので“甲秀楼”に。途中に、公園があって、そこでは、一組、囲碁を打つ人たちが居た。また、“バシ、バシ！”と駒を紐で叩いて楽しんでいる老人も。

（甲秀楼）

（公園の休憩所で囲碁を）　　（紐で駒を回す老人）

（スマホ関連の巨大ビルか）　　（立派な人民病院）

（地図上を探した蟠桃宮は、地名だけ残り、高層マンションになっていた）

ホテルに戻って、今日も、夕飯は、近くのレストランと言うより、中華料理店へ。

（ホテルの近くの中華料理店内）

（ビールと全部で、三十数元と安い）

ホテルに戻って、今日も早い就寝。

○ 10月16日（日） 帰国

叫醒服務（ジャオシンフーウー）は、五時に頼んでおいたが、四時半には、起き出し、何時もの柔軟体操、シャワー、お茶、朝食、コーヒーを済ませ、パッキングして、五時二十分には、フロントに下りていった。外は、まだ暗いが、今日は、雨で、五時半に、車さんが、迎えに来る約束であったが、どうも、フロントのボーイは、自分の知り合いのドライバーがいるようで、車さんは、ボーイに、追い立てられてしまったようだ。それでも、ボーイの頼んでくれたタクシーでも、空港まで、50元というので乗り込んだ。

貴陽空港では、荷物検査の列も、そんなに長く無く、待ち時間も少なく飛行機に乗れて、難なく、上海浦東国際空港に着いたが、上海空港では、チェックインの列も長く、荷物検査の列が、また、長蛇の列で、時間が掛かり、白人のお姉ちゃん（2、3人）などは、既に、出発時間が過ぎていると半泣き状態でおり、係官に頼んだらと言ったら、取り合ってくれないらしい。しかし、私も、上海空港には、10時前に着いて、出発が、12時なので、大丈夫だろうと思っていたが、流石に、列が、少しも進まず、焦ってきたが、どうすることも出来ない・・・。流石に、11時半近くまでなったのに、列が、まだまだなので、チェックインの際、ちょっと話した、関西国際空港行きの日本のサラリーマン風の青年に（彼らは、12時半出発）、間に合うだろうかと、聞いてみたら、彼らの仲間らしい中国語の上手な（中国の友達だったか？）お兄ちゃんが、係官に、何か叫んでくれて、2番窓口へ、急げとのことで、飛んで行った。この緊急用らしき荷物検査の列も、結構並んでいて、白人の乗客が、何か中国語で係官と怒鳴りあったりし、殺気立っている。私も、焦って、中国人の、もたもたしていた叔母ちゃんを追い越そうとしたら、い

きなり、肘鉄食らって押し戻された。全く中国の女性は（日本の女性も？）強い。機械での荷物検査では、折り畳みのこうもり傘が、駄目なようで、一旦、こうもり傘を出して、再検査など、厳重な検査なので列が掃けないようだ。それでも、焦って、時間を見る余裕なく、（12時ごろだったか）急いで、搭乗口に行ったら、客は、既に乗り込んでおり、私が、多分（もっと遅い人も居たか不明？）最後らしく、どうにか、飛行機に乗り込めた。

隣の窓際は、上海出身の中国の女性で、成蹊大の大学院で勉強する為に、今は、日本語学校に通っていて、たまの里帰りの戻りとのこと。やはり、一人娘とのこと。（貴陽空港でのお世話になった王さんも、一人娘。）名前は、張依婷さん（ジャン、イーティン）とのこと。ここでも、余計なことに、”ニューション、ダ、シンフー、シー、ダン、ママ。（女性の幸せは、母親になること。）”繰り返したか。（私の三人娘達の家庭を見ていて確信した訳ではあるが・・・。）勉強も良いけど、程ほどにして、御両親を安心させてあげたらなど、ちょっと余計なことなどを話したか。

（最後の難関の荷物検査）

（帰りの張さんと）

最後に、上海空港では、相当慌てて焦ったが、着きました成田空港。

○　エピローグ

　旅行中も、囲碁の本と一緒に、持ち歩いたが、一ページも読まなかった『暗黒の中国からの脱出』顔伯鈞著の本を読み終えた。著者は、腐敗した中国共産党官僚の資財公開を求める「公盟」運動の中国の大学教授であったが、逃亡、逮捕、拷問、脱獄の末、現在は、タイに、亡命しているとのこと。貴陽空港での親切な青年達とは、掛け離れた別の世界が、同じ中国にあることが、ちょっと信じがたい。確かに、著者の言う中国には、共産党と全面的に対抗する政党がなく、言論の自由も無いことは、決定的な欠陥国家ではあろう。著者の言う中国の民主化と憲政の確立を目指す体制改革は、何時になったら、成し遂げられるのであろうか。チベット紀行の際の中国人作家の“王力雄”も、チベットの独立は、中国の民主化が、行われない限り、実現しないだろうという話の中国の民主化は、何時になったら、確立するのであろうか。
　その後、写真が、整理できたので、貴陽空港で、お世話になった王さん、高さんに、お礼の写真をメールで送ったが、当初、Googleメールだったので、届かなかったのかと思って、その後、Hotmailでも送ったが、残念ながら、返事が無いので届いたかどうか不明。

中年からの海外一人旅　第三十二章　完